

以上いささか註文をつけたが、吾々はむしろ本書の与えてくれたような豊富な伝記資料を持ち得た事を喜びたい。5部に分れていて、1部は1846年(父 James の生年)から1912年まで、2部は1912年より1920年まで、3部は1920年より1926年まで、4部は1926年より1936年まで、5部は1936年より1953年までに区切って、この伝記は書かれているが、それぞれの部につけられた *Haunting Ghosts*, *The Birth of a Soul*, *The Making of a Poet*, *Wilderness Regained*, *Hopeless Hope* の subtitles は平板で、むしろなくもがなと思う。

本書の jacket ではこの書は O'Neill の “definitive biography” であると謳っているが、そんな事はない。この書は all about O'Neill を盛りこんではいない。これとは異った approach で O'Neill の伝記は更に書かれる必要がある。しかも本書は貴重である。この

× × × × × ×

The American Vision: Actual and Ideal Society in Nineteenth-Century Fiction. By A. N. Kaul. New Haven: Yale Univ., 1963.

那 須 頼 雅

本書は、アメリカ小説のひとつの顕著な性格を指摘した、極めて野心的な労作であるといえよう。19世紀アメリカの代表的小説家 James Fenimore Cooper, Nathaniel Hawthorne, Herman Melville, Mark Twain をとりあげて、小説と社会との相関関係という面から、その性格を探ろうとする試みである。

ある小説家が、一見してその時代、社会から遠ざかり、超越しているようにみえても、やはりこの小説家は、その時代と社会の産物であることは言うまでもない。ただ、その表現が極めて象徴的であったり、あるいは、夢想的、幻想的になりすぎていたりして、その小説家と社会との相関関係を見失いがちであるだけである。この著者は、そういった観点から、当時のアメリカ小説を観察する。アメリカには、西ローロッパの文明世界から、いきなり原始的大陸へ移されたという、真にアメリカ的経験がある。この経験は当然にして、小説の中に同じくらい真にアメリカ的な theme と pattern を織込まずにはいられない。そして、この真にアメリカ的経験が生みだした、新しい型の小説はその特質として、現実社会への批判と理想社会への執心の二つをあわせもつと主張する。つまり、これらアメリカ19世紀小説家達は、現実社会を極めて深刻に表現

貴重な O'Neill 伝記を研究者はしばしば参照せねばならない。更にたくましい努力で本書の補訂がなされる事を期待しよう。と同時に異った新しい伝記の出現をも期待したい。その兆しはすでにある。Doris Alexander はその伝記の続篇をやがて発表するであろうし、John Henry Raleigh も一つの O'Neill 伝を脱稿したという。尚又 Lou Scheaffer は数年前から、その O'Neill 伝を着々準備中であるとも聞く。併し又こうした伝記が出揃った後にも、独自の方法で綿密に事実を跡づけた本書はその存在意義を少しも減じはしないであろう。

註) 古い Richard D. Skinner, *Eugene O'Neill, A Poet's Quest* や Sophus Keith Winther, *Eugene O'Neill, A Critical Study* (revised and enlarged edition) も reprint で入手できる (Russell & Russell, Inc., N. Y.). (同志社大学文学部教授)

する面と、同時に、だからといってその現実社会の枠に閉じこめられないで、たえず理想社会を念頭におく面との両面をもっていたというのである。

この新しい小説の theme と pattern を探る方法として、この著者は、同時代の英国小説家との比較をこころみる。Dickens, Disraeli, Kingsley 等の英国作家は、意図的にみて明白な reformist であったのに対して、それらアメリカの諸作家は殆んどそういった面をもたない。たとえば Dickens の *Oliver Twist* には明らかに社会制度改良を迫るものが読みとられるが、Mark Twain の *Huckleberry Finn* には、社会を超越する基本的人間倫理にふれるもののみがあって、奴隷制度の是非に関わるものが見当たらないと説明する。その理由として、この著者は、これらアメリカ小説家に一つの根強い myth 信仰を見出している。つまり、個人は尚も自由行為者であること、社会は仮借ない暴力により作家の imagination を圧迫しないこと、それゆえに現存社会を改良せねばならない必要性が薄いこと、これらをかれら作家は固く信じて疑わなかった。この意味から、かれらには reformist の資格が欠除しており、単なる visionary にすぎなかったということあげている。

さて、この reformist としての意図が見当たらないという面から、この著者は論を進めて、当時のアメリカ小説の他のいくつかの特質を導きだしている。たとえば、‘optimist’ とか、‘pessimist’ とかのレッテルは、英国の同時代作家の場合と異なり、かれらにはそぐわないものであるとか、又、英国の同時代の小説と較べて、アメリカ小説には pathos の効果を目指すものが

稀であるとか、更に又、その比較において、アメリカ小説は *sentimentality* に墮していないなどである。いずれも極めて暗示的な指摘といえよう。

最後に結論として、これら四人のアメリカ小説家は、理想的な人間関係の場の建設と個人の精神的更生という *vision* を強く作品に打ちだしてはいるが、その実現への具体的な道を示してはいない。ただ、その崇高な思想と行為を支持する *moral energy* の宝庫を創りだしている点にこれら小説家の意義を著者は認めている。

ところで、全体としてのアメリカ小説に、この論がどのように展開されるかは、この新鋭批評家 Kaul 氏の今後の研究に期待するところであるが、非常に興味

× × × × × × × ×

A Reader's Guide to Herman

Melville. By James E. Miller, Jr. New York: Farrar, Straus and Cudahy. 1962

The Example of Melville. By Warner Berthoff. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1962.

The Wake of the Gods; Melville's Mythology. By H. Bruce Franklin. Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1963.

松山信直

Herman Melville は 1920 年代に「よみがえった」作家である。1920 年代といえば、いわゆる *imaginative literature* のさまざまなジャンルにおいて、いくつかの画期的な動向が起り、新しい試みが次々と華々しい成果をあげていった時代である。その華々しさの蔭にかくれてはいるが、1921 年に完成した *The Cambridge History of American Literature* は、数多くの学者批評家の協力によって、アメリカ文学研究が *serious* な学問的研究に値することを立証した点で、意義のある著作となった。その後、1922 年には Carl Van Doren の *Contemporary American Novelists* が、1922 年には Louis Mumford の *The Golden Day* が、それぞれ出版され、1928 年には N. Foerster が、数人の執筆者によるアメリカ文学論 *The Reinterpretation of American Literature* を編纂した。そして、1929 年には、アメリカ文学全般にわたる研究に発表の場を提供する学術誌 *American Literature* が、次々と現れては消えていった“little magazine”と対照的に、学会を基礎として創刊された。

深く見守るに値しよう。特に、こういった *vision* が現代のアメリカ小説にまで受け継がれているのか、もし受け継がれてきているとすれば、どのような作品に、どのように変容して、引継がれてきているかが、われわれの関心事である。特に、本書が大胆にして開拓者的な試みであると思われるのは、19 世紀アメリカ小説解明の視点を *vision* においている点である。今迄、*innocence*, *solitude*, *escapism* などの視点から論じたものが多く出たがいずれも一面的な憾みがあったのにひきかえ、この *vision* への着目はこれら小説の複雑性を見事に総括して、研究者の理解、共鳴を喚ぶのに成功している。(同志社大学商学部助教授)

1891 年に死没した Melville は、1852 年に *Pierre* を出版して以来、その不評のために大方の読者から忘れられていたのだが、アメリカ文学再評価の動きの一環として、殆んどこの動向と歩みをそろえて再評価、再検討が加えられた作家である。

この Melville の“revival”は 1910 年代の後半から起りはじめ、1921 年の Reymond Weaver によるはじめての伝記出版をきっかけとして、Melville への関心は急速に高まった。そして海洋冒険物語のみならず、哲学的な、象徴的な、晦渋な作品を残した彼の数奇な生涯に光があてられ、彼の作品が改めて読み直され、新たな感動を読者にひき起すこととなった。

それ以来、熱狂的ともいえるほどの関心が Melville に向けられ、遺稿を含む数多くの資料が出版されたのみならず、さまざまな角度からの、さまざまな面に対する批評研究が企てられた。いわゆる *critical biographical* な書物も書かれたし、作品の *source*, *genesis* の研究、思想面の研究、他の作家との連関 (Milton, Shakespeare, Hawthorne, Transcendentalists など) も研究された。また、*folklore*, *myth*, *humor* などの観点からの研究でも、また、作品分析や彼の文学の芸術性の評価などでも数多くの試みが行われた。事実、Weaver の伝記くらい、この 40 余年の間に、Melville だけを論じた単行本が 50 冊近くも出版され、Melville に関する一章を設けた書物や、Melville を扱った雑誌論文、学位論文が 1,000 点にもなろうとしている例は、アメリカ文学に関する限り、Henry James を除いて、他に類がなかろう。このことは、文学批評の無限の可能性と多様性を語りつつ、あわせて、Melville 文学の偉大さ、深さ、多面性を我々に改めて強く印象づけてくれるのではあるが、その反面、この 40 余年間に積み重ねられた業績は、あらたに Melville に関して筆を